

コルセットファッションでゴシック&ロリータは「大人」になる

——「Salon Corset Night」への参加を通して——

富田 あゆみ

はじめに

2018年6月。ある一つのイベントが惜しまれつつ最終回を迎えた。回数を重ねるごとに全国に熱狂的な支持者を増やし続け、西麻布にある「super eight(旧 RAUL)」のラグジュアリーな空間には、キャパシティーの限界である約250名が集まり、その最後を見届けた。それはコルセット愛好家による、コルセット愛好家のためのイベント「Salon Corset Night」だ。

残念ながら私は最終回には参加できなかったが、過去に二度参加した経験がある。一見フェティッシュ趣向の強いイベントに思えるが、参加者の中にはゴシック&ロリータファッションの愛好家も少なくない。性的要素を消し去るロリータファッションと、コルセットは相反する存在に思えるが、共存することが可能となっている。

過去の『女子学研究 Vol.7』で「大人ロリータ」について取り上げたが、このイベントを通して、年齢を重ねた「ロリータ」たちが少女から女性に変貌していく新たな筋道が見いだせたように思う。

1. 「Salon Corset Night」とは

「ドレスコードは、コルセット着用であること」。非常にシンプルではあるが、そのドレスコードの厳しさには定評があった。「コルセット」とは名ばかりの、ウエストをくびれさせることのできないファッションコルセットは認められず、このイベントでは弾かれてしまう。「Salon Corset Night」は、そんなストイックなコルセット愛好家4人で2008年にスタートした。主催者によれば、その後順調に動員数を増やし、2016年に会場を「西麻布 RAUL」に移すとその人数は160人にまで上がった。イベントの様子はSNSで拡散されて知名度を上げ、11回目の2017年には200人、そして12回目で最後となった2018年は250人を達成した。

イベント中はショーや物販もあるが、「コルセット」という共通のアイテムを通じた交流がメインとなっていた。会場には主催者を含むコルセットマニアや、より細いウエストを目指し歪なほどウエストを絞るタイトレーサーから、このイベントのためにコルセットを買ったような初心者まで幅広く集まった。コルセットを使ったコーディネートであれば参加可能であるため、和服に合わせたり、ゴシック&ロリータファッションに取り入れたり、独創的な衣装を作ってきたり様々なファッションが見られた。主催者、スタッフ、参加者のほとんどが女性で、ボンテージファッションのような肌の露出度が高い参加者も中にはいるが、女性参加者が痴漢やナンパといった不快な目に逢わないよう、主催者が目を光らせているため、恐らく他の類



図 1 「Salon Corset Night Vol. 11」の広告

似イベントに比べ、かなりクリーンで健全なイベントに仕上がっていた。

2、コルセット、そしてタイト・レイシングについて

諸説あるがコルセットは16世紀に登場し、時代によって形や呼称を変化させながら現代まで受け継がれている。コルセットの中には、バストを強調するものや、ヒップのボリュームを抑えるものなどが存在するが、「Salon Corset Night」でよく見られたのは、ウエストを細くくびれさせるコルセットであった。それは日本人の体型はあまりボリュームがないという理由も考えられるし、一方で、タイトレーサーがこのイベントの中心に存在していたからとも考えられる。

タイト・レイシングはコルセットが急激に普及した19世紀に最盛期を迎えた。当時の雑誌『イングリッシュ・ウーマンズ・ドメスティック・マガジンイギリス女性の家庭誌』のコルセットについての投稿欄、「コルセット通信」によれば、上流階級の娘を預かる学校や寄宿学校ではウエストを細くすることも教育内容の一環として位置づけられていたらしく、10代前半の少女たちにも、ウエストが太くなりすぎないように、コルセットの着用が推奨されていた¹。

タイト・レイシングが苦痛であろうと、医学者や芸術家たちに批判されようと女性たちがコルセットを手放さなかった理由の一つは、コルセットがステータス・シンボルであったことだといえるだろう。身体にかなりの負担を与えるコルセットは、肉体労働には絶対的な障害となることから富裕階級である身分証明になった。19世紀のコルセットのブランド名にも、ステータス感と高級感を醸し出す「プリンセス」や「侯爵夫人」「ヴェーナス」といった女性たちの価値観を反映する名称が多かった²。

タイト・レイシングのもう一つの側面はフェティズムとサディズム、マゾヒズムである。ジョアン(2005)と古賀(2004)はスティールによる1996年の著書『*Fetish: Fashion, Sex and Power*』内のインタビューに、夫を喜ばせるためにきついコルセットをつける女性や、自分自身の快楽のためにタイト・レイシングを行う女性が登場していることを指摘している。先の『イギリス女性の家庭誌』の「コルセット通信」に寄せられた投稿の中にも、タイト・レイシングによりもたらされる興奮や圧迫、苦痛を称賛するものもあり、サド・マゾヒズムの傾向を表している³。また、古賀は現代のコルセットについて、「20世紀の関心は締め付けられた細いウエストではなく、紐で締められる女性というエロティックなイメージへと移行し」、フェティシズムやエロティシズムと強く結びつくアイテムとしている⁴。

「Salon Corset Night」に参加するタイトレーサーたちは、より小さいサイズのコルセットを目指し、日々自らのコルセットの紐を締めあげる「トレーニング」を重ね、時にそのくびれたウエストの画像をSNSに掲載している。そして「Salon Corset Night」のアカウントがその画像を拡散するため、イベント当日が近づくにつれ、コルセット愛好家たちの熱が高まっていく。彼女たちの目的は男性を喜ばすためではなく、自らの達成感や快感、ステータスにある。「楽なのにくびれる」コルセットが称賛されることから、過度な圧迫や苦痛は彼女らからも歓迎されないことは明らかである。圧迫や苦痛よりも、自分の力でウエストサイズを支配することのできる達成感と、拘束具としてのサド・マゾヒズム的な側面が現代のタイトレーサーを興奮させているのだと考えられる。

そしてイベント当日は、主催者を筆頭に、コルセットファッションの先駆者である緑川ミラノや、コルセットデザイナー(いずれも女性)といったコルセットの紐締めの名人たちに、こぞって女性たちが締められに行く光景が見られた。それはSMの女王様と奴隷のような関係性を彷彿とさせる、エロティシズムに満ちていた。

¹ 古賀玲子『コルセットの文化史』(青弓社:2004, 65-66)

² 同上、82

³ ジョアン・エントウイスル『ファッションと身体』(日本経済評論社:2005, 281)

⁴ 古賀玲子『コルセットの文化史』(青弓社:2004, 154)

3. フェティッシュなアイテムからゴシック&ロリータのアイテムへ

現代におけるコルセットは、体型を補正する目的より、フェティッシュでセクシュアリティなアイテムとして愛好されている。しかしアンダーグラウンドなイメージにならないのは、ヴィヴィアン・ウェストウッドやマドンナらが、女性のためのフェティッシュな格好を普及させてきたためだろう。1970年代の女性のパンクは、伝統的な女性らしさを公然と嘲笑するようなければいけない化粧、ガーター、ストッキング、皮革、鎖といった破壊的なスタイルからインスピレーションをくみ上げていた⁵。さらに1992年に発行されたマドンナの写真集『セックス』も、サド・マゾヒズムや両性愛やレズビアンといった、女性のセクシュアリティからはタブーとされる領域を探ったものであり、この時代の彼女のイメージは性的サブ・カルチャーからインスピレーションを得ている⁶。

こうしたパンクやフェティッシュ、性的サブ・カルチャーのいくつかは、本来の意味をそぎ落としながらファッションに落とし込まれていく。コルセットも同じく、フェティッシュなイメージを希薄化させながら、ゴシック&ロリータファッションの中でたびたび利用される。

例えばコルセットとスカートが一体型になった、コルセットスカートはゴシック&ロリータファッションではよく用いられている。ウエストのラインをはっきりさせられるので、スカートのボリュームを強調するゴシック&ロリータファッションと相性がいい。「ATELIER PIERROT」では、バストまで覆われたコルセットとスカートが一体になったワンピースがロングセラーとなっているし、「ALICE and the PIRATES」も、コルセットスカートを頻繁に発売している。

ゴシック&ロリータファッションはその名の通り「少女性」に重きを置いたファッションであるが、近年においては少女性からの脱却が進んでいるように見える。もともと「ゴシック」の要素が強いブランドは、フリルやレースをふんだんに使ったブラウスや、パニエで膨らんだスカートといったロリータファッションの特徴を踏まえながらも、肌の露出が多かったり、靴のヒールが高かったりと成熟した女性を思わせる要素があった。そしてコルセットも、少女性とは一線を画すアイテムである。「ALICE and the PIRATES」は、「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」というロリータファッションブランドの姉妹ブランドにあたるが、少女性の強い「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」にはコルセットスカートは皆無に等しい。「ALICE and the PIRATES」はテーマの中に「妖艶な雰囲気」や「華やかで少し大人っぽいロリータ」という言葉があるように⁷、ロリータよりも大人っぽいイメージである。ただ、これらに使われているコルセットはボーン(張り骨)が入っている作りであっても、本格的にウエストをくびれさせることはできない。あくまで、コルセットのデザインを引用しただけに過ぎない。しかしここから、本格的なコルセットに目覚め、タイトレーサーの仲間入りをすることは珍しくない。「洋服感覚で着られるかわいいコルセット」をテーマにしたブランド「abilletage」、个性的で華やかなオリジナルコルセットを販売する「Dangerous Nude」など、他にも多くのショップやコルセットブランドがゴシック&ロリータ界限には存在している。

『女子学研究 Vol. 7』内で、『KERA』や『Gothic&Lolita Bible』は、実はもう必要とされていないのではないか⁸と指摘した矢先、『KERA』は2017年6月号で月刊発行を終了してデジタルマガジン化となり、『Gothic&Lolita Bible』も同じタイミングで休刊となった。ゴシック&ロリータファッションは紙媒体の雑誌から、SNSを中心としたネットのメディアに移行し、各々が好きなスタイルを見つけて極めていく時代となった。

雑誌によってファッションがカテゴライズされなくなった分、選択が自由になったように感じる。そして発

⁵ ジョアン・エントウィスル『ファッションと身体』(日本経済評論社:2005, 276)

⁶ 同上

⁷ 「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」オフィシャルサイトより。
(<https://www.babyssb.co.jp/brand/>、最終アクセス 2019.3.1)

⁸ 富田あゆみ『女子学研究 Vol. 7』(2017, 18)

展したものの一つが、コルセットファッションだといえよう。『KERA』や『Gothic&Lolita Bible』では本格的なコルセットが大きく取り上げられることはなかった。それは読者ターゲットが少女だったからだろうと考えられる。ボディラインを強調、さらに誇張するコルセットは性的な成熟の象徴になる。そのため、ロリータファッションに本格的なコルセットを合わせることはタブーであり、それはもう「ロリータ」ではない。

3. 着せ替え人形的な身体

ゴシック&ロリータファッションの中にコルセットを取り入れる例のほかに、「Salon Corset Night」で見られたのは、ロリータファッションの時は少女性を守ったスタイルをしている人が、その会場では全く違うファッションをしていた例である。素肌や、肌が透けるレース素材の衣服の上からコルセットを装着したり、ブラジャーを着けた胸元や、太ももが見える服装であったり、メイクや髪色もロリータファッションの時とは全く違う、性的な魅力を押し出したものになっていた。普段からそのようなファッションをしているのではないので、限定的な場所でのみ解放される「もうひとりの私」といったところである。しかし、彼女たちは自分の身体を露出したいという欲求からその姿になるのではない。

ゴシック&ロリータファッションの世界では、一緒に遊ぶ相手や行き先によって服装を変える慣習がある。服の色や柄、テーマなどをお互いに合わせたり外したり、まるで着せ替え人形のように楽しんでいる。時には女性が「王子様」や「ヴィジュアル系バンドマン風」の服装をするなど、異性装ですら珍しくない。性別のほかにも、「ロリータ」では実年齢よりも幼く見せたり、「ゴシック」では大人っぽい魔女になるなど見た目の年齢も変化させている。その中で、フェティッシュファッションは、「成熟した女性」という女性性を強調したある意味「女装」であると言える。ゴシック&ロリータファッションは、自分の想像するキャラクターや世界観を可視化することのできるファッションであるが、「コルセット」という一つのアイテムからイメージーションを広げ、その結果としてフェティッシュファッションをまとう女性が生み出されている。

フェティッシュなファッションについて、ジャニス(2018)によればスティール(1996)が「ファリック・ウーマン」という概念を取り上げている。ファリック・ウーマンは「過度に高く尖ったヒールの靴から革や毛皮のような手触りや生地まで、ファッションのもっともフェティシズム的な対象や象徴を介してできあがり⁹」、ファッションを通じてある種の権力、男らしさを表現している。「ファリック」はつまり「男根的」という意味である。私はこのフェティシズムな対象に、ロリータファッションの大きく膨らんだスカートを加えたい。

ゴシック&ロリータファッションとフェティッシュファッションは両極端にも思えるが、精神的には表裏一体のように感じる。どちらも他者、とりわけ異性からのまなざしや評価を期待したものではなく、自分が一番「なりたい」と欲した姿である。フェティッシュファッションで街中を歩く人はいないだろうが、最近ではゴシック&ロリータファッションも以前ほど街中で見かけることは少なくなった。しかしブランドや個人主催のイベントやお茶会は毎週末のように頻繁に開催されている。そのイベントやお茶会といった場を通して、同士たちの価値観や美意識は共有され、強化されていく。「Salon Corset Night」は、性的なまなざしや被害を受けることがなく、フェティッシュをファッションとして受け入れてもらえる場所だからこそ、高い美意識を持ったフェティッシュファッションの女性が集まっている。その点において、ゴシック&ロリータファッションと類似していると感じた。

⁹ ジャニス・ミラー(訳 西條玲奈)、「フェティシズムでは終わらない—ファッションと精神分析」 アニエス・ロカモラ、アネケ・スメリク 編 『ファッションと哲学』(フィルムアート社: 2018, 87)

4. おわりに

「Salon Corset Night」は終わりを迎えたが、このイベントの影響力は強く、感化された参加者の一人が遠く離れた福岡でも、「Salon Corset Night」と同じような、ラグジュアリーな空間でのコルセットを主力にしたイベントを開いた。さらに、「Salon Corset Night」の主催者は新たにコルセットイベントを開催予定、とこの界限は精力的に展開をしているようだ。コルセットファッションには、明確な見本となるような雑誌媒体はない。それぞれの感性や情報収集能力が試されるファッションとなっている。それだけに、自由度が高く発展の可能性を感じる。大衆的になることはないだろうが、コアな愛好家たちが市場を支えるだろう。

身に着けるものがふわふわでひらひらのロリータ服ではなく、タイトなコルセットに代わっても、その精神論や方法論は変わらずに受け継がれていくのだろうと思う。



図 2 福岡で開催された「Salon de Corset」の Web 広告

【参考文献】

- アニェス・ロカモラ、アネケ・スメリク 編、2018、『ファッションと哲学』フィルムアート社
古賀玲子、2004、『コルセットの文化史』青弓社
ジョアン・エントウイスル、2005、『ファッションと身体』日本経済評論社
ベアトリス・フォンタネル著、吉田春美訳、2001、『図説ドレスの下の歴史 女性の衣装と身体の2000年』原書房
米澤泉、2014、『「女子」の誕生』勁草書房